受理された手紙

森野 水琴

二週連続して金曜日に、やらずの雨が降り、週末の疲れが残ったまま男は出勤した。上司から次の日曜日に、以前から話のあった縁談の相手と会うように言われた。

これでは身辺整理どころではない。女性ふたりと別れ話をしただけで、まずは縁談の相手に会うことにした。

会ってはみたものの、互いに縁談を進めようという気にはなれなかった。

上司から破談の申し入れがあったと残念がられたが、男は内心ほっとした。

金曜日に男は三週間ぶりに女の家を訪れた。二週間前に届けられた手紙を懐に忍ばせている。

別れの手紙だったので、もう引越しているかもしれないと思ったが、以前と変わらず暮らしているらしい。

女は予期していたらしく、すぐに食事を出してくれた。

雨が降っていないので、雨宿りする必要はないのだが、男は帰ろうとしない。

土曜になっても男は帰らない。一心に女と時を共有している。

女の歓喜の雨が降る。

日曜の朝、男は帰った。